

誤用について

鈴木 雅 光

1 はじめに

誤用とは何か。誤用は *misusage* の訳である。この語は *mis + usage* から成り立っているように、言葉の使い方が誤っているという意味である。従って、誤用は文法違反となる。正確には語法違反となるのだが、この言い回しは一般的ではない。語法より文法が一般的であるのは、もともと語法の問題の背後に、英文法はどうあるべきかという問題があり、語法が文法の中に一括りにされて論じられてきた、という歴史的背景があるからである。文法と語法が同じ袋の中に入ることは、例えば、*Longman Dictionary of Grammar and Usage* や *Concise Dictionary of American Grammar and Usage* というように、辞典名に文法 (Grammar) と語法 (Usage) が併記されていることから、容易に推察することができる。

しかし、文法の包括的な研究が極めて多いのに比べて、語法の方はかなり少ない。誤用に関しては、正用法が問題となるときに、語法の中で散発的に扱われているにすぎない。誤用は周辺的な問題として、まともに取り上げられてこなかったというのが実情である。誤用を正面から取り上げたのものとしては、病理現象と見なされてきた誤用が、正しい言葉の欠陥を予防または修理するのに役立っていると主張したアンリ・フレエ (Henri Frei) の『誤用の文法』や、間違いは決して偶然ではなく、まじめな精神行為でそれには意味があると主張したフロイト (Freud) の『精神分析入門』があげられる。

小論では、誤用も語法であるという観点から、誤用の生じる原因や誤用に付随する問題を考えてみたい。

2. 誤用研究

まず、誤用も語法であると主張したい。誤用は文法違反であるが、誤用が生じるには理由がある。その理由を解明するのが誤用研究であり、語法と同じように誤用も説明されなければならない。誤用研究による解明すべき目標として、(1) なぜ言葉を間違えるのか、(2) 間違いは何を意味しているのか、(3) 間違いから何を学ぶべきかの3点があげられる。

2.1 なぜ言葉を間違えるのか

人はしばしば言葉を間違える。そして間違いにはそれなりの理由が存在する。フロイトは「間違いには意味がある」と述べているが、これは間違いを犯すには理由がある、と言い換えても同じことである。言葉の誤りを検討してみると、①誤りに原因あり、②誤りにルールあり、③誤りに意図あり、④誤りに綾あり、ということが分かる。

2.1.1 誤りに原因あり

誤りの原因としては、ケアレスミスのような単純なものから、無知によるもの、誤解によるもの、あるいは心理的要因によるものなどがある。原因のない誤りはない。誤りの具体的な原因として、以下の7つが考えられる。

無知：知らなければ誤りを犯すケース

ラテン系の名詞を複数にするとき、まったく知識がなければ、*data* を *datas*, *strata* を *stratas* のように、英語式に *-s* を付けてしまうことがある。もともと *data* は *datum* の複数形、*strata* は *stratum* の複数形であると知っていれば、複数形に *-s* を付けるようなことはしない。このような間違いは教養を疑われるケースである。

うろ覚え：身に付いていないものは誤りやすいケース

Formidable や *integral* のもっとも強いストレスが、第一音節なのか第二音節なのか、記憶が不確実だと間違ってしまう。またうろ覚えから言い間違いや読み間違いをする。これで有名になった首相がいる。その首相は、

例えば、頻繁を「はんざつ」、踏襲を「ふしゅう」、前場を「まえば」、未曾有を「みぞうゆう」などと誤読を連発した。焦眉の急に至っては「しゅうびの…」と数回間違えた。おそらくその首相には、これらの漢字が正確に身に付いていなかったものと思われる。

混同：類似するものは誤りやすいケース

類似するものは混同が起きて誤りが生じる。Inflict と afflict のように意味が似ているもの、factious と fractious のように綴りが似ているものは、混同が起きやすい。構文でも同じである。Give が第 4 文型に用いられることから、同義の供給動詞 provide が They provide us food and drink のような構文を取ってしまう。これは非標準用法である。

不注意：不注意により誤りが生じるケース

3 単現の -s を付けないのは不注意によるものである。She like horses / My sister live in Florida のように子供は書くことがある。指摘されればすぐ直すので、不注意による誤りである。教育を受けない者は -s が付くことすら知らない場合があるが、これは無知のケースである。

類音・同音：類音・同音は誤りやすいケース

She climbed the latter of success に見られる ladder を latter と書くのは、類音による誤りである。I looked at the underside of it's head や They have decided to sell there house に見られる its を it's、their を there と書くのは、同音による誤りである。

心理：心理が影響するケース

心理的な理由が文法に影響し誤りを犯す。Each of the girls were dressed neatly において was ではなく were となっているのは、直前の girls に be 動詞の数が牽引されたからである。これには人は遠いものより近いものに、心が奪われやすいという心理が働いている。It's me ではなく It's I が正しいと言われると、between you and me を考えすぎて between you and I にしてしまう誤りも、心理作用が働いている。

意図：わざと誤りを犯すケース

普通、間違いは意図的に犯すものではない。ところが、誤用の中には意図的に犯す例がある。人の耳目を引き付けるためや笑いを誘うために、敢えて誤りを犯すのである。注目されようと故意に誤りを犯すのであるから、この誤りはしくじりではなく技巧である。

2.1.2 誤りにルールあり

誤りは勝手に生じるのではない。文法にルールがあるように誤用にもルールがある。例えば $\text{dog} : \text{dogs} = \text{cow} : x$ のような「パウルの比例式」がある。この式に従って、dog の複数が dogs なら cow の複数も cows と誰もが類推するわけである。では woman の複数はどうか。Woman の複数形を記憶していないと、cow が cows だから woman の複数も womans であると考えてしまう。子供はこのような誤った類推をしばしばしてしまう。パウルの比例式が誤って適用されたのである。類推は言語活動を活発にする行為であるが、時には誤用を生み出す行為でもある。パウルの比例式の誤った適用は、誤用の規則性の一つの例である。

誤りを生じさせるきっかけは、2.1.1 で述べたような具体的な原因が考えられるが、その原因の生じ方にルールがあると推測される。Pinker(椋田訳 1995: 209) が「“無知からくる間違い” の大半は、すっきり論理が通っているだけでなく、英語文法の構造を鋭く反映している」と述べているように、この種の見解はしばしば述べられてきた。例えば、「人間の使う言語には例外についてもある特定のきまりがあるのであって全く気儘勝手な例外が許されるわけではない」(梶田(1976: 67)) など。このような誤用の論理、例外のきまりを解明していくのが、誤用研究の目標である。

2.1.3 誤りに意図あり

誤りは普通故意に犯すものではない。言葉を使うとき我々は誤りを避けようと努力していることを考えれば、意図して誤りを犯すことはないということが分かる。ところが、意図的に誤る場合がある。意図的な誤りは何らかの効果をおねらうものである。肯定的な誤りかつ許容される誤りでもある。特に、詩人や作家が文学上の戦略として利用する技巧である。詳しくは後で述べるが、一例をあげておく。次の例では to は不要であるが、弱

強のリズムを維持するために、文法を駆逐した例である。例は Coleridge の *The Rime of the Ancient Mariner* から。

For all averred, I had killed the bird

That made the breeze to blow.

Roberts(黒田訳 1966: 304-5)は「詩人というものは…良い意味において非文法的である」と詩人の役割を肯定的に述べているが、我々は詩人の戦略上の意図を理解する必要がある。

2.1.4 誤りに綾あり

綾とは修辭的効果や表現効果などを積極的にねらい、表現に彩りを与えるものをいう。綾は上で述べた意図的な誤りと関連している。意図的に誤るということは、誤りに価値を見出すということでもある。文法的破格でもって驚かせる、語法的取り違いでもって意外性を演出する、あるいは修辭的技巧でもって、新鮮さを与えるなどの効果がある。要は、表現というのは、単調さを破るために、構文上の効果、修辭上の効果、あるいは印象上の効果などを求めるものであり、誤りもまたその効果を担うことがあるのである。

誤りの種類や技巧によっては、マラプロピズム (malapropism)、詩的許容 (poetic license)、破格構文 (anacoluthia)、くびき語法 (zeugma) のように、専門的な名称を与えられているものもある。これらは意図的な誤りに属する。つまり言葉の綾というのは、意識的に生み出すものであり、それが文法上の操作に依存しているのである (詳しくは 3.3 参照)。

2.2 間違いは何を意味しているのか

誤用の問題の解明すべき 2 つ目の目標は、間違いは何を意味しているのかということである。まず、考えられるのは、誤用によって恥をかくということがあげられる。誤用によって、笑われる、非難される、教養を疑われる、軽蔑される。その結果、恥をかくのである。

誤りがなぜ問題となるのであろうか。子供は言葉を獲得していくときよく間違いを犯す。大人はその言い間違いに、笑みは浮かべても言葉の誤りを咎めることはない。しかし大人が間違いを犯すと、子供の場合とは違って、咎められる。あるいは嘲笑、蔑み、軽蔑の対象になる。極端な場合そ

の人の氏、素性、教養、知性までもが問題にされることがある。だから大人は間違いを避けようとする。法律を犯すと罰則があるように、言葉を犯すと、上のような制裁を受けるのである。アナウンサーが間違えると、非難の投書が殺到するのがこの例である。

『間違えると恥をかく日本語小辞典』というタイトルの本がある。このタイトルは、間違えるとどう思われるのかということを示している。恥をかくのである。特に日本人は恥をかくことを嫌がる。英米人もそのような傾向があるようである。規範文法では分離不定詞を避けよ、とよく言われる。Pinker(椋田訳 1995: 211) は、このルールは無意味なことだと非難しながら、無知なやつと思われるのが不安で、分離してしかるべき不定詞を分離しなかったことが何度かある、と告白している。間違いと思われるのが恥なのである。それは教養がないと思われたり、素性までが問題にされることへの恐怖心なのである。

次に、誤用は、人間の心理を表しているということがあげられる。誤用行動は、人間の心理を反映する。フロイトは「間違いには意味がある」と述べているが、それはこのことである。フロイトは『精神分析入門』で言葉の間違いを考察した。言葉の間違いには、言い違い、読み違い、聞き違い、書き違いなどがあるが、フロイトはどのような条件下で、人は言い間違いをするのかについて説明する。2つほど例をあげてみる。

①一つの言葉の代わりに、それと非常によく似た違った言葉を滑らす。

長年、東海大学に勤めた教授が筆者の勤める東洋大学に移ってきた。同僚や父母の前で自分の大学をよく「東海大学」と言い間違えては、言い訳をしていたことなどはこの例である。出る杭を「出る釘」、立つ鳥を「飛ぶ鳥」などもこの類である。入試で正解を選ばせる問題において、正解と極めて似ている語を挿入するのも、類似が誤りを誘うという人間の心理を利用したものである。

②自分の言おうとしている言葉と、正反対の意味の言葉を滑らす。

この現象が生じるのは、反対のもの同士というのは、概念上親近性があるので、心理的連想では互いに密接に結び付いているからである。民主党議員が衆議院本会議の答弁で、宮崎県の口蹄疫の被害農家に対して「心からのお祝いを…」と言いかけたが、慌てて「失礼しました。お見舞い申し上げます」と言い直したことがあった。

フロイトによれば、言い間違いは「それ自身の目的を追究している正当な心理的行為であり、また内容と意味をもった表現と解してもよい」ということになる。つまり、言い間違いにも予期したか、意図した他の行為があるというのである。「お見舞い申し上げます」というところを「お祝い申し上げます」と言えば、言った本人にとっては不幸が嬉しいという隠された意図がある、ということになる。上の例の民主党議員に、実際に、隠された意図があったかどうかは不明だが、野党からは本当にそう（＝災難にあった農家を案じること）思っていないからだと言われた。

フロイトは「間違いには意味がある」ということを研究し、「間違いは決して偶然ではなくて、まじめな精神的行為で、それには意味があり、二つの異なった意向が併発して出来上がったものである」と主張する。フロイトの間違いの研究は、誤用の研究にとって少なからぬ示唆に富んでいる。

2.3 間違いから何を学ぶべきか

誤用の3つ目の目標は、間違いから何を学ぶべきかということである。太古から延々と続く人間の争いを評して、人間は歴史から何も学んでいないと言う。人間は言葉の間違いからも何も学んでいないように思える。構造上の言語はよく考察するが、間違いを議論することは少なく、同じ間違いを繰り返している。

我々は誤りから何を学ぶのか。誤りは単なる語法上のあるいは文法上のミスではない。人間の心の写しである。従って、人間の心を反映する以上、誤りは犯すものではなく紛れるものであると知るべきである。我々は誤らないように努力をしている。我々は常に意識的にせよ無意識的にせよ、誤りの存在を意識しているのであるが、にもかかわらず誤りは生じる。従って、誤りはなくせないものであるということを知るべきである。なぜか。誤りは犯すものなら、犯さないように気を付ければよいのだが、それでも誤りは紛れ込むなら、それは防ぎようがないからだ。

次に、間違いから学んだ後に、間違わないようにするにはどうしたらよいかを考えるべきである。これは間違いを避けるのは可能かという問題であるが、間違いを減らすことができても避けるのは不可能である。間違いを減らすためには、間違いを誘う原因を知る、間違いの多い領域を知る、文法に習熟する、細心の注意を払う、文法的わなや落とし穴にはまらない

などが考えられる。

3 誤用の諸相

ほとんどの誤用というものは、文法規則の大海から見れば些細なものかもしれない。She walk であろうが a apple であろうが、意味に変化はないのだから。ところが、母語話者にとっては3単現の-sは、実に気になる存在かつ厄介な存在のようである。次の引用は、このことを如実に示している。本人も意図的に-sを落としている。

Don't you think the third person singular S in English is redundant and need to be thrown off? The third person singular S in English seem such a nuisance! (英語の3人称単数の-sは余分だから捨て去る必要があると思わないですか。英語の3人称単数のsは実に厄介に思える！)

標準英語では認められない3単現の-sが落ちている例は、誤用の中でもかなり目立つ存在である。特に子供の英語や無教育者の英語に多い。

3.1 誤用の多い領域

誤用は以下のような領域に多く現れる。

①口語

文語より口語に誤用が多いのは、口語は文語のように何度も考えて作り直さないからである。口語の言語は瞬時的であり、かつ誤用はあまり気にならないという側面もある。文語なら認められないのに、口語なら許容されるということも多い。

②子供

子供は間違いを犯す。間違いの原因としては、無知であるからということがあげられる。しかし、子供の間違いは、言葉を獲得する過程にあるので、大目に見られる。

③E-mail

この領域は間違いが氾濫している。子供ばかりではなく大人も多い。Their を there, your を you're と取り違えることから、hope to here from

you や **right me please** のように、ネット上には信じがたいような誤りがあふれている。E-mail は推敲しないで書くという点で、口語に似ている。しかし文字に残るので口語よりは気になる。E-mail 特有の綴りであり、間違いではないと擁護すれば、新しい言語の出現とも言える。Crystal (2001: 128) は “E-mail has extended the language’s stylistic range in interesting and motivating ways.” (E-mail は言語の文体の範囲を興味深くかつ刺激的に広げた) と述べている。

④ 広告

広告には単純な誤記が多い。耳目を引きつけるため、意図的に間違ふこともある。間違いは商業上の戦略である。従って、単純な間違いとは区別する必要があるが、文法違反ということには変わりはない。

3.2 許容される誤りと許容されない誤り

間違いにも許される誤りがある。テレビで若い女優がステーキをどう焼きますかと聞かれて “Welcome” と答えたことがあると言ったら、周りの聴衆がどっと沸いた。この例はもちろん “Well-done” の言い間違いであるが、わざと間違ったわけでもなかろう。無意識的に似ているものと混同したのであり、その間違いは教養が問題になるほどの間違いでもない。むしろ笑いを誘う間違いであり、肯定的な誤りである。

しかし、誤りには許されるものと許されないものがある。つまり、文法には誤りをどこまで許すかという問題がある。文法の尺度の一つに、“correct” か “incorrect” というのがあるが、文法家によって容認度に違いが生じることがある。

Who was he looking for?

厳格な文法家は、上の例では目的格にならなければならないから、who は incorrect で whom が correct であると主張する。しかし、特に口語では who の方がかなり使用度は高い。Mittins *et al.* (1970: 107) の調査によれば、68% が容認している。これについて文法家は、文法よりも慣用 (usage) によってそうなっているからだと説明する。かくして who は許容される誤りとなる。

文法書を読んでも「普通～である」式の説明が多いことに気付く。「常に～である」という説明は、文法書では禁物なのである。絶対的な文法

規則というのは存在しない。ある語法について informant に尋ねると、意見が分かれることがある。Informant にも背負ってきた言語的背景があるからである。文法とはネイティブスピーカーの直感であるというが、文法上のルールに従って言葉を使っているのは確かであるにしても、そのネイティブスピーカーは、自分が文法であるとは思っていないだろう。

語法辞典を見ると、誤用は軽微な (venial) 誤りからひどい (gross) 誤りまでの評価がある。このことは許容に程度問題があるということを示している。人間の犯す罪にも軽微なものから、許し難いものがあるのと同じである。それでは、許すか許さないかの分かれ目はどこにあるのか。一般的には、不快を感じさせる誤りかどうかの物差しをあげることができるだろう。既に触れたが、あの程度の漢字に誤読を連発した首相に、不快どころか呆れた国民が多かったのではなかろうか。小学生にすら「漢検 (= 日本漢字能力検定) を受けたほうがいいよ」と言われるような誤用は、howler か boner に属する。

3.3 意図的な誤り

誤りを犯す場合、普通は、間違おうと思って間違っているわけではない。しかし、間違おうと思って間違える場合がある。意図的に間違えるのである。例えば、広告は人の耳目を引き付けるために、敢えて誤りを犯すことがある。その効果は見る者を驚かしたり、意外性をもたらすことである。わざと間違えて笑いを誘うマラプロピズム (malapropism) は、意図的な誤りの典型例である。また誤りには技法がある。一般的に誤りは非難されることが多いが、軽蔑を避け笑いを取るには、意図的に誤る技術が必要なのである。

Malapropism の訳語をほとんどの辞典が「マラプロピズム」としているが、荒木一雄・安井稔 (編)『現代英文法辞典』(三省堂 1992)は「ことばの誤用」と訳している。福原麟太郎・吉田正俊 (編)『文学要語辞典』(研究社 1978)は「ことばのはき違い」と訳している。前者の辞典は語学的風味をきかせた訳語、一方、後者の辞典は文学的な味付けを施した訳語である。福原・吉田 (編) から malapropism の説明を引用してみる。

Sheridan(1751-1816) の *Rivals*(1775) という喜劇に Mrs. Malaprop という

女が出てきて、発音や文法は間違えないが言葉を滑稽に取り違えて話す。instinctive を insensitive, arrangement of epithets を derangement of epitaphs という。

マラプロピズムは、発音や文法上の誤用ではなく、語の誤用である。日本語でいう「洒落」に相当し、笑いを意図している。フロイトは『精神分析入門』で、作家が創作する言い間違いを重要なものと見なし、「しばしば作家は、言い間違い、あるいはその他の間違いを詩的描写の技巧に利用する」と述べている。マラプロピズムは、詩人・作家による文字上の戦略なのである。

詩的許容 (poetic license) も意図的な誤りである。詩的許容とは、詩で効果をあげるために用いる韻律や文法上の破格をいう。詩人は特異な表現方法で、読者に衝撃を与えるために、言語をかき乱し意図的に文法破壊を起こす。Roberts(黒田訳 1966: 304)が「意図的な非文法性は作家、ことに詩人の重要な武器である」と述べているように、詩人による文法の逸脱を肯定的に弁護するのが、詩的許容と呼ばれる現象である。次の例は Coleridge の *The Rime of the Ancient Mariner* からである。

; and it was he

That made the ship to go.

to は不要であるが、弱強のリズムを作るためという英詩の規則が文法に優ると、上のような例になる。

屈折比較変化の -er, -est が正しいのに、韻律を優先させるために迂言比較変化の more, most を使うのも詩的許容である。She made up her mind and then her face のようなくびき語法 (zeugma) も意図的な誤用である。この例では made up her mind とこの慣用句の made up を利用して、her face を結び付けているが、この結び付きは強引である。

3.4 定着した誤用

定着した誤用とはどういうことだろうか。誤用は一般的には非難される。にもかかわらず、非難された語法が定着するということは、どういう理由があるのだろうか。

英語は記録に残るものからおよそ 1500 年の歴史があるが、この歴史を

辿ってみれば、現代の語法では非難されるものが、Shakespeare あたりまで遡ってみると、正用法だったということはざらにある。あるいは現代では正用法となっているものが、Robert Lowth に糾弾されたということもある。アメリカでは使うのにイギリスでは使われなとか、文法書には誤りと指摘されているものが、慣用として大手を振って歩いているということもある。

結局、言葉の正誤を語るということは、現代という軸足でもって語るということである。現代人は誰も Shakespeare 時代の語法でもって、言葉を使っているのではない。また、言葉の正誤は自分中心に語るということでもある。アメリカ人は、イギリス人の基準において、言葉を使っているのではない。

学校文法では非難されるが、定着した誤用を2つ見てみよう。学校文法の説明にもっとも反するものは、3.2でも触れたが、目的格の *whom* の代わりに使われる主格の *who* であろう。学校文法は非文法的なものは排除するので、次のような例は非難する。

Who do you admire most?

Who are you speaking of?

この用法の *who* を *OED*² は非文法的ではあるが、口語ではよくある例と説明している。

Used ungrammatically for the objective WHOM ... Common in colloquial use as obj. of a verb, or of a preposition following at the end of the clause. (目的格 WHOM の代わりに非文法的に使われる…。動詞の目的語、あるいは節の終わりに生じる前置詞の目的語として、口語ではよくある)

Whom の代わりに *who* は、現代イギリス英語では98%の割合で使われているというから、目的格が崩壊していることが分かる。Sapirはこの傾向を、現代英語の三大潮流 (*drift*) の一つにあげている。現実に合わせて目的格の *whom* は、やがて廃止されるかもしれない。You が主格と目的格に使われていて、あまり混乱は起きていない例もあるのだから。

口語は文法に反するものが表れやすい。非文法的なものであっても、慣用として使われていれば「口語」の label を付けて、受容するのが現代の

流れである。口語で定着した語法としてbe+目的格がある。It's meのmeは、be動詞の次であるから、主格のIにしなければならないと主張する文法家がいる。しかしIは非常に堅苦しいので、口語ではmeを用いるのが一般的である。誤用が定着するということは、本来認められないことではあるが、にもかかわらず定着するということは、言葉は変化するということの証拠である。

4 まとめ

小論で述べたことをまとめてみる。

誤用の研究は、周辺的なものと思われていて少ないが、誤用も語法であるという観点から、語法と同じように誤用も研究されなければならない。誤用研究により解明すべき目標として、なぜ言葉を間違えるのか、間違いは何を意味しているのか、間違いから何を学ぶべきかの3点があげられる。

誤りには原因があり、ルールがあり、意図があり、そして綾がある。我々は誤りを避けようとする。それは、非難されないように、教養を疑われないように、恥をかかないようにするためである。また、誤用は人間の心理を表すことがある。このような誤用心理は解明する必要がある。我々が誤用から学ぶべきものは、誤用は人間の心の写しであるということである。人間の心を写す以上、誤りは犯すものではなく、紛れるものである。また、誤用から学ぶべきものは、誤りはなくせないということである。しかし、誤りはなくせないが、減らすことは可能である。

誤用が頻出するのは、口語、子供、e-mail、及び広告の領域である。誤りは許容されるものと許容されないものがある。意図的な誤りは、詩人・作家が文学上の戦略として利用する技巧である。誤用の中には定着したものがあある。誤用が定着するということは、本来認められないことではあるが、にもかかわらず定着するということは、言葉は変化するということの証拠である。

参考文献

Crystal, David. 2001. *Language and the Internet*. Cambridge: Cambridge University Press. 1-23.

- Frei, Henri. 1929. *La grammaire des fautes*. 小林英夫訳『誤用の文法』みすず書房, 1973.
- Freud, Sigmund (フロイト, ジークムント). 1917. 安田徳太郎・安田一郎訳『精神分析入門』角川文庫, 1970. 13-88.
- 梶田優. 1976. 『変形文法理論の軌跡』. 大修館書店. 67-70.
- Mittins, W. H., Mary Salu, Mary Edminson and Sheila Coyne. 1970. *Attitudes to English Usage*. London: Oxford University Press. 105-107.
- Pinker, Steven. 1994. *The Language Instinct*. 椋田直子訳『言語を生みだす本能(下)』日本放送出版協会, 1995. 205-255.
- Roberts, Paul. 1964. *English Syntax: An Introduction to Transformational Grammar*. New York: Harcourt, Brace & World, Inc. 黒田巍訳『変形文法入門』開文社出版, 1966. 304-305.
- 鈴木雅光. 1999. 『例外の文法』. 東京精文館. 1-20.